資料 2-2

市民対話会議開催結果

１　開催概要

・令和７年８月８日（金）　於：本庁舎　第１、２、３会議室
・次期環境基本計画の策定に向けて開催したワークショップに参加いただいた大学生及び高校生、計５名が参加

２　意見交換等について

・参加者から、「環境への関心・ワークショップへの参加動機」、「京都基本構想への意見」、「ワークショップで出た意見」等について御発言いただいた。
・これを受け、市長を交えて意見交換を行い、最後に市長から総括的な御発言をいただいた。

３　主な発言内容

（１）環境全般について（導入：環境を感じるとき）

（ア）出席者の主な発言

○　日々のニュースで気温が４０度を超えたということを耳にするとき、待ったなしだなと感じる。
○　自宅の近くに鴨川が流れているが、そこを歩くとき、環境を意識する。
○　京エコロジーセンターのような施設がもっと都心にあったらよい。子育てを応援することにもつながる。またこうした取組が観光と繋がればよい。
○　夏はとても暑くなっているため、室内で子どもが過ごせるようなものがあるとよい。
○　京都の不要な木材を使い、遊具をつくり、暑くても遊べる屋内の公園ができたら良い。

（イ）市長の主な発言

○　今の暑さは自分たちが若い頃にはなかった。
○　木屋町通をよく歩くが、ごみがきれいに拾われていて高瀬川が綺麗だと感じることもある一方、ごみが落ちていて残念だと思うときもある。
○　環境活動は、ボランティアで取り組む方も多いと思うが、それはそれとして尊い。継続的に行ってもらおうとすると、別の形で評価することが持続性にも繋がる。
○　我々も清掃活動に参加することもあり、その際にごみをみつけると貢献できたという思いが湧く。
○　行政は行政でごみの処理を行うが、地域の人も一部分だけでもそうした活動を行うことで地域への愛着が湧く。行政に委ねず取り組むと自分ごとになる。

（２）京都基本構想について

（ア）出席者の主な発言

○　現状認識は分かるが、やや抽象的で、２０５０年に向けてどうしたいのか明瞭ではない。

○　２章の自然と人間の共存・共生について、放置森林の問題を考えると、自然と共存は志向までで、体現はできていないのではないか。

○　第４章に、エネルギー問題や脱炭素、気候変動、地球温暖化といった言葉が出てきていない。京都の歴史をみても地球温暖化に取り組んできており、脱炭素先行地域といった最新の取組もあり、ポテンシャルのある都市だと思う。

○　自然との共存はたくさんキーワードがでてきており、それには肯定的であるが、京都市でやるのではあれば脱炭素はあらゆるところに関わるのでその言葉が含まれてもよいのではないか。

（イ）市長の主な発言

○　ある程度抽象的で平易な言葉を用いて、環境、教育、産業、伝統文化などについてトータルに捉えたときの京都のまち柄を示すこととしている。各論については個別の政策があるため、京都基本構想では京都の大きな羅針盤をつくり、個別計画についてはそれらと連携するものとした。

○　京都は三方が山に囲まれ、川や豊かな地下水があることで、そうした価値を大切にしてきた文化はあると思う。他のまちに比べるとそうした価値を大切にしてきた。

（３）ワークショップでの意見など（公園、観光、環境教育（情報・ポイント制度）、連携）

（ア）出席者の主な発言

ａ　公園

○　公園をもっとつくってもよいのではないか。

ｂ　観光

○　外国人観光客のごみ問題について、ごみのポイ捨ての抑制のため、ホテルの予約の際に京都でのルールを周知するような仕組みがあってもよい。

ｃ　環境教育（情報、ポイント制度）

○　市民にどうやって気候変動を伝えるか、どこからアクセスできるか、環境をまとめたアプリやウォーターサーバーのマップの統合など。マップで給水できると表示された場所に行ってみたら公園の水飲み場だったなど、情報をもっとクリアにしてほしい。

○　ポイント制度を取り入れてはどうか。

ｄ　連携

○　学生のまちということもあり学生からも意見をもらうことが大切。大学生にとっても京都のシステムづくりなどに関わることができることは大きい。

（イ）市長の主な発言

ａ　公園

○　西京極の運動公園について、一般的に公園だと思われていない。公園らし

いレイアウトとして緑を増やすというようなアイデアや、ほかにも、一般のビルのオーナーにとっても限られた制約の中でも緑を増やすことにインセンティブを与えるというまちづくりがあるかもしれない。公園に求める機能として、例えば暑さを避けて屋内で遊べるところを整備する、あるいは子どもが安心して面白く遊べる遊具を入れることなどが考えられる。

b　観光

○　京都では、観光客や観光事業者などに向けたルールとして、京都観光モラルを作っているが、周知がまだ追いついていない。「モラル」という言葉は上から目線であり、そうではなく、観光客側に共感もってもらうことが必要。

c　環境教育（情報、ポイント制度）

○　京都基本構想で大事にしていることとして、「０．１市民」をつくろうというものがある。京都に住んでいないが京都が大好きな人や旅慣れた旅行者もいるため、そういう人にも発信してもらう。大学生も含めアイデアがある方、関心のある方から知恵をいただくということが必要。

○　商店街の商品引換券がもらえるというものや、銭湯のフリーパスがもらえる仕組みづくりなどは京都らしいのではないか。

d　連携

○　地域の自治会もそうだが、学生にも関わってもらうことが重要。学生はバイトと学校の往復になってしまいがちであるが、もっと社会に関わってもらうことで人生の糧にもなる。

○　京都基本構想でも学藝衆という構想があり、京都にはいろいろな名人がいる。それらから学ぶ。ＡＩにできない学びに溢れたまちとして、京都は森や木、虫、魚、などの宝庫であり、鴨川の河原で学べることもある。

（４）まとめ（市長振り返り）

○　京都には、豊かな学びとコミュニティがある。宝物がたくさんある。それらのマッチングは我々の役割である。

○　経済成長の代償として、大量生産と大量廃棄が地球温暖化の原因となっている。一方で、鴨川の水質が改善し、オオサンショウウオなどが見られるようになるなど良くなっている部分もある。

○　環境は観光、情報、教育などとも繋がっている。

○　京都を様々な分野と世代との交流のまちとし、そういった場を作っていきたい。

当日写真